

巻 頭 言

教養部長 安村 仁 志

戦後50年——世界は激動しています。日本もさまざまな意味で壁にぶつかり、舵とりがいろいろ難しくなっています。また、大学をめぐる環境も変わってきています。

その中で四年一貫教育を踏まえたカリキュラム改革が求められ、本学でも四年一貫教育検討委員会答申に沿って各学部と教養部の話し合いが進められ、本年度から社会学部、情報科学部、文学部で新カリキュラムがスタートいたしました。残りの学部とも真剣な話し合いが続けられているところです。その過程で《教養教育》にとっては、今日の状況においてそれがどのような意味をもち、どのような機能を果たすかが問われています。教養教育を担ってきた教養部という組織についても今後検討されることになっています。

一方、今年に入って阪神地区を突如大地震が襲い、私たちは現代の文明社会全般についてさまざまな問題をつきつけられました。又、一連のオウム事件ではこれまでには考えも及ばなかったような事態・現象に社会全体が大きな衝撃を受けました。

大学人は今日における大学教育を真剣に考えなければならない時にきています。私たち教養部教員もその一員としてこれまでと違った形で大学教育における教養教育にあたっていかなければならない時にきています。カリキュラムの改革はその一環ではありますが、何よりも大切なのは、制度の問題にまして教育自体であります。また、教育に携わる教員自身の姿勢であります。その意味で教育および教員の自己点検が真摯になされなければなりません。

今日においてこそ、真の《教養》が求められています。“塩が塩けをなくしたら、何によって塩けをつけるのでしょうか”(マタイ 5:13)ということばがあります。意味は少しことなりますが、社会とその活動が細分化、専門化される一方で、グローバル化、多様化する中で真の教養という塩けはその必要度を増しているのではないのでしょうか。

『教養教育研究』第5号が発行されることになりました。これまで教養教育について地道に議論し、また研究してきた成果がさらに一つ積重ねられるわけで、編集にあたって下さった方々にはそのご尽力に心より感謝申し上げます。また、原稿を執筆して下さいました方々、各種の議論に加わって下さった方々にも感謝いたします。

本号が本学における教育のさらなる充実に寄与することを願ってやみません。